

新理事挨拶 3

太陽光発電の使命と未来、
JPEAの果たすべき役割

一般社団法人太陽光発電協会 理事 鈴木 伸一



1. はじめに～私たちの地球はなぜ、こんな風になってしまったのか？～

今、私たち、否、すべての生命を生み育んできた地球が、有史以来、未曾有とも言うべき瀕死の状況に陥っています。各地で天変地異が起り、生態系は破壊され、変異し、環境汚染により、その毒は結局、それを垂れ流した私たち自身の生命と文明を脅かしています。今、世界にとって喫緊の課題ともなっている新型コロナウイルス感染症もそのひとつと言って過言ではありません。これらはすべて、拝金思想、即ちお金こそ神様であるという愚かな価値観の下、行き過ぎた資本主義が横行し、ほんとうの豊かさとは、何の関係もない「お金」というバーチャルな、今となっては単にデジタルの数字にしか過ぎないものを際限なく得る為だけの、虚しい欲望に取り込まれ、自分さえ、自分たちさえよければいい、という「エゴという悪想念」を世界中で発生させ、その結果、足ることを知らない過剰で無用な再生産や（実際には多量の無駄な廃棄を伴う）消費をひたすら拡大し、その悪循環を繰り返してきた、いや、今も繰り返し続けていることの結果だと言えましょう。このままいけば、間違いなく未来に来る私たちの子供たちや孫たちは世界的なスケールで阿鼻叫喚地獄と言えよう事態に直面するでしょう。それもこれも私たちが地球規模で生産し続けている「エゴという悪想念」が、その元凶なのです。

つまり、本来ならば、人類が心から反省し、この「エゴという悪想念」の発生排出を止めなければ、根本的な解決にはなりません。私たちに与えられている「エネルギー」という資源も、コストだ便益だという、見かけ上の経済合理性に振り回されるのではなく、いかに与えられていることに感謝をして、まさしくサスティナビリティという視点で自分たちがこの世からいなくなった後の世界を素晴らしいも

のにする、という決意と志でそのビジョンを描いてゆかねばならない、と思うのです。それを私たちは「エネルギー維新」と呼んでいます。

2. Non-FITの時代への加速・実現に、業界自らが挑戦を

この日本にFITという制度がスタートして、約9年が経過しました。少なくとも、太陽光発電システムにおいては、曲がりなりにもそのキックオフから加速装置としての役割を果たし、まだ課題は山積と言いながら、次世代のエネルギー改革の主力を担う期待を受けられるところへ来ました。これは、種々批判や風評被害を受けつつも、パイロット・ランナーとしてこのフィールドを開拓し挑戦して来られた多くの先人の方々の努力と献身によるものと考えています。この場をお借りして、あらためて多大なる感謝を申し上げます。

さて、であるからこそ、私たちはそのバトンを受け継いで、この発展を次のステージに乗せねばなりません。次のステージとは、FITやFIPという支援策を殊更必要とせず、自力独力で主力電源としての使命を全うする太陽光発電の確立だと思えます。その為には、種々、過渡期はまだあるにしても、できる限り早くNon-FITと言われる経済的にも物理的にも、支援を受けずとも自ずから社会や世界から生まれ、必要とされる魅力や実力を備えた電源として自立しなければならないと思います。「太陽光発電は結局、金儲けの手段にしか過ぎない」という揶揄や誹謗中傷の余地を許さない圧倒的な貢献型のエネルギー源、まさしく大きな愛の化身とも言える太陽の恩恵を体現している、と評価されるような存在になることが必要です。その為には、理不尽な事に対してはきちんと主張をしてゆかねばなりません、苦しいからと言って筋の通らない、更なる支援やイ

ンセンティブを期待し要望するのではなく、ここからは自らの努力と知恵で太陽光発電を主力電源にしてゆくの、という腹の括りが業界や当事者に必要だと思います。その昔、太陽光発電の黎明期にこれに挑戦した人たちは、もっともっと厳しく高いハードルに歯を喰いしばって挑んだはずで、そのことへの感謝と恩返しをする意味でも、そして歴史をこれから創ってゆく意味でも、ここからが正念場であると思います。

3. 近視眼的、自分たち（の時代）さえよければいい、という先人、「過去」になるな～未来の子供たちや子孫はどうなってもよいか～

つい先日、サントリーホールディングス株式会社から5月5日の「こどもの日」向けに放映された下記のようなTVCMがあります。その名も、「素晴らしい過去になろう」。

今の子供たちが大人になった時、その子供たちに「未来」を用意するのは、やがて彼らに「過去」と呼ばれる「今のぼくたち」なのだ。ぼくたちは、素晴らしい「過去」になれるだろうか？ そうだ、この子たちの「素晴らしい過去」になろう。と、いう主旨のTVCMです。ご覧頂きたい、と思えます。

【こどもの日】「素晴らしい過去になろう」篇 サントリーホールディングス株式会社・企業広告
<https://www.youtube.com/watch?v=1n3ycdZBCbA>

最近、再び、再エネ賦課金の増加により、各世帯や各法人にとって電力料金が上がる、という報道が出ているようです。年間一世帯当たり、約1万円の上乗せが発生する、各世帯の「負担」は過大となる、的な論調になっています。実際には本年2021年からFITの買取価格が、産業用（全量）では11円/kWhとされ、このうち電力会社が原価として負担する分が約10円/kWhなので、現在（以降の新設）は既に国民に課される賦課金はほんの僅かしかありません。それだけ太陽光発電のコストが下がってきた、ということです。現在、報道されている数兆円と言われる再エネ賦課金は殆ど2012年から始まったFITの初期～数年の間に導入された案件によるものです。それはよいのですが、結局こういった類の報道記事や論調には明らかに2つの大きな心得違いがあります。

- ① まずよく再エネ賦課金を「国民『負担』」と表現する向きがあります。これではまるで、この「負担」が「迷惑なもの・余計なもの」とでも言いたげな表現になっています。果たしてそうでしょうか？言うまでもなくカーボンニュートラルや地球環境問題に代表される如く、再エネの導入拡大は上記のサントリーさんのTVCMとおなじく誰かの不始末を国民が「負担」している、という類のものではありません。一時期のバブル崩壊による不良債権処理等に公的資金が注入されたような事例とは全く意味が異なります。議論するまでもなく、これは来るべき未来の子どもたちに安全で安心な地球を残すための「未来（生命）への投資」です。言い換えれば、「未来への種蒔き」「植樹」なのです。上記のTVCMで言われているように、私たちが来るべき子どもたちにとって「素晴らしい過去」になれるかどうかの挑戦なのです。皆さんは子どもたちへの教育には大変なお金をかけている人も多いでしょう。年金や医療費はじめ、高齢少子化の進む中、子どもたちにとって、私たちはそれこそ「負担」こそ残せてもなかなか「希望」を残してあげることが難しくなっています。しかし、この「投資」「種蒔き」「植樹」こそは間違いなく、彼らから「素晴らしい過去」として感謝され、「おじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さんが苦しい中を頑張って残してくれた」希望であり財産であるのです。そのことを考えた時、目の前のなにかがしかの電力料金が上がることを惜しみ、近視眼的にそのツケを未来に、子どもたちへ回すことを選択するのでしょうか？親として祖先として、「自分たちの時代さえよければいい、と、自分たちのその日その日の利益しか考えなかった人たち」という恥ずかしい過去を残さぬ為、これをまるで「迷惑なもの」として印象操作する動きには本当に情けなさ、恥ずかしさ、を感じます。
- ② 再エネ賦課金は総額だと数兆円、一世帯当たり年間約1万円に達したそうです。月額にすれば、833円です。今回、新型コロナ対策で国はひとり10万円の給付で12兆円という支出をしました。全体での対策費は勿論、100兆円を超えるとも言われています。で、あれば、①の主旨を考えた時、この月額833円の世帯当たり負担（実際は投資であり種蒔き）がどれだけ莫大だと言うのでしょうか？必ず、子どもたちの未来を救う、と

いうこの「植樹」へのクラウドファンディングがそんなに過大で価値のないものなのかどうか、ぜひ自分たちの良心に向き合い、教えて頂きたい、と思います。

4. 生まれ来る子どもたちに 誇れる明日を残すため あなたに伝えたいことがある。「XSOLUTION」が伝えたいこと。

私たちは昨年2020年9月、太陽光発電にいったい何ができるのか、をあらためて考えました。それを大きく3つのテーマとして提唱させて頂いたのが、この「XSOLUTION」です。

- ① 「国際紛争・世界平和」へのソリューション
 - ・エネルギー（化石燃料）の歴史は、その奪い合いの歴史
国際紛争が起きる要因の70%は、エネルギー資源の利権争いであると言われます。エネルギー（化石燃料）の歴史は、その奪い合いの歴史と言えます。
 - ・エネルギー（化石燃料）が一部の限られたしくみと支配下にあるという問題
この問題は、化石燃料が、一部の産油国からしか手にできないものであり、加えて、限られた富裕層や王族などが、歴史的にその利権を独占してきたこと、更には巨大資本や企業、政権等がそのエゴ・利害により支配権を独占してきたこと等に起因しています。
 - ・今こそ、化石燃料の需要を減らす太陽光発電の普及を
このような世界の状況を変えるには、エネルギーにおける化石燃料への依存度や需要を減らし、その国や地域、更には個人に必要なエネルギーを、国家や地域、個人レベルで、どんな時にも分け隔てなく、そして脅かされることなく確保できるようにすることが必要です。そのためまずは、他国に依存しない自給自足エネルギーである太陽光発電の、全世界への一層の普及が必要なのです。太陽光発電で過半のエネルギーが確保できるようになれば、化石燃料への需要・依存度は大幅に下がります。
 - ・争いが減り、先進国と途上国間の格差是正につながる
化石燃料の需要が下がれば、同じくその価値も下がります。価値が下がれば、多大な軍事費を費やしてまでの化石燃料をめぐる争いや国際紛

争はなくなります。また、地域間の貧富の格差についても、たとえば、電気が通っていない小さな村ですら、エネルギーを自給自足できるようになれば、世界中の平均的な暮らしのクオリティが一気に上がります。このような状況になれば先進国と途上国間を含めた、世界中の貧富の格差是正へとつながり、これを原因とした暴力の発生や貧困を原因として、テロ組織等へ参加しようとする人々の抑止にもつながります。

- ② 「エネルギー・セキュリティ」へのソリューション
 - ・エネルギーを自給できないことのリスク
近年、世界中で台風、震災など自然災害が頻発しています。これらの災害は建物倒壊等の直接的な被害が発生するだけでなく、停電等のライフラインやインフラの分断が引き起こされ、より多くの方々の安全生命が脅かされ、更には長期化した場合の生活への影響や生命危機への恐怖は計り知れません。
 - ・エネルギー自給率の低い国が抱えるリスク
エネルギーの自給ができていないことのリスクは、国レベルになると、より大きなものとなります。たとえば日本のようにエネルギーを外国に依存し、エネルギー自給率が10%以下と低い国の場合、国際紛争などの有事が起きた際には、たちまちエネルギーの供給危機に陥ります。
 - ・自給自足エネルギーの普及へ、ソリューションは「分散化電源」太陽光発電しかない
結論から言えば、エネルギーセキュリティに関しても、自給自足エネルギーである太陽光発電のさらなる普及こそが、有効な解決策であるということです。更に言えば、国家レベルの「総エネルギー自給率」の向上だけでなく、エネルギーを消費する個々のユーザーが、自分たちの使う電力を自分たち自身で確保できるかどうか、つまり「電源の分散化」が、電力系統網等への被害が発生した場合の対策として極めて重要であり、これを実現する決め手は、今のところ太陽光発電しかありません。
 - ・エネルギーの供給リスクにさらされない強靱なエネルギーセキュリティを確保
太陽光発電によりすべての国や地域、そして法人・個人が、どんな時にも分け隔てなく、そして脅かされることのないエネルギーを自給できれば、世界中の人々が災害等によって降りかか

るエネルギーリスクを回避できます。さらに、各国の総エネルギー自給率が飛躍的に高まり、これにより、世界中がエネルギーの供給リスクにさらされない、強靱なエネルギーセキュリティを確保できることとなります。

- ③ 「地球環境問題」へのソリューション
 - ・地球温暖化は環境問題の一側面にすぎない
地球環境問題を考察する際、CO₂排出量の増加による地球温暖化が大きく取り上げられがちですが、それは環境問題の一側面にすぎません。CO₂や地球温暖化以外にも、地球破壊の究極の原因である「人類の発するエゴの思い」により、環境（水、大気、自然）汚染や、地震、地軸の変化といった「天変地異」とも言うべき異常事象が世界中で頻発しています。特に気候変動は、干ばつ、山火事、台風、大雨、洪水、生態系の異常を引き起こし、果ては疫病やウイルスをも産み出し、食糧危機にまでつながります。
 - ・化石燃料への依存が地球環境全般を脅かす
気候変動が起きる要因のひとつには、地球温暖化原因のひとつとされている化石燃料への異常な依存があります。勿論、化石燃料は歴史的に人類の発展に必要であり、それ自体は悪ではありません。しかし、人類のエゴによる不必要・異常な拡大再生産が起こり、人類が化石燃料に依存しすぎたことが、遂には地球環境全体を脅かすことになってしまいました。そして、化石燃料への異常依存の影響は温暖化や気候変動だけではなく、化学物質である化石燃料を原料とすることによる有害ガスの発生、大気汚染、水質汚染。プラごみ等の廃棄による土壌汚染、海洋・水質汚染等が引き起こされ、生物への影響や様々な環境汚染問題につながってしまっています。
 - ・化石燃料を減らしてゆくこと、そして自然や環境を大切にしながらの再エネ普及、それが地球環境問題の解決につながる
つまり化石燃料への依存度が減ることで、気候変動だけでなく様々な汚染源も減り、あらゆる地球環境問題の解決につながります。勿論、太陽光発電の普及自体が自然破壊や廃棄物の大量発生につながるようなことがあってはなりません。不要・強引な山林開発や自然破壊を伴う建設設置を禁止し、地域や行政との連携・共感や協力・共同により、景観や環境への悪影響を排

除し制限すること、そしてガラスや太陽電池モジュール等の廃棄システムの整備、リサイクル技術やしくみの確立が必須条件なのは言うまでもありません。

- ・再生可能エネルギー・太陽光発電の普及と「主力電源化」が、地球と日本の未来を変える
つまり、すべての地球環境問題の解決、そして国際平和やエネルギーセキュリティ、地域間格差等の解決には、化石燃料への依存という問題を解決することが必要不可欠なのです。

5. さいごに～太陽光発電協会（JPEA）にこれから求められるものについて～

太陽光発電協会（JPEA）は確かに業界団体であり、各会員企業の事業・ビジネスの利害や利益を代表する立場にあります。しかし、我々が携わっている産業は単にお金儲けの手伝いをしたり、その利益を保護することだけをよしとしてよいものではありません。ある意味、地球の未来、子どもたちの未来を担っているのです。そう考えた時、JPEAは勿論、NPO団体ではありませんが、やれコストメ리트がどうか、経済合理性がどうか、お金の話ばかりに固執して、歩を進めるのなら、その存在価値はありません。自分たち（の時代）さえよければいい、というエゴ、悪想念に立ち向かい、それを解消すべく提唱や努力をしてゆく、という理念、スタンスが不可欠だと思います。それぞれの構成企業にはそれぞれの個性があります。得手不得手も規模もそれぞれ違います。その個性と得意技を十二分に活かして、それでも同じ理想に向けて進むこと。ある意味、個社の立場、そして社内の議論ではなかなか脱し切れない、「金儲けがすべて」「自分の評価さえよければいい」という企業のしがらみ・内部実態から抜け出て、本来、自分たちの良心に恥じない活動が可能な「場」なのかもしれません。それは、政治であっても行政であっても教育機関であっても、皆、「自分ではない誰かの為に」お役に立ちたい、いわゆる「利他」の思いこそが最高の生きがいである、と本当は思っているはず。私たちは、そういった「場」を、JPEAというところに与えられていることに心から感謝して、自分たちにできることを微力ながら尽くしてゆきたい、と考えているのです。